

我が日本民族をキリストへ

# 日本民族総福音化運動協議会

## 第15号

### 素晴らしい教会一致の動き

#### ―実を結んだ聖霊派の謙遜―

(宣教師訓練センター所長)

総裁 奥山 実



関東に「関東宣教協力会」という超教派の交わりがあって、関東地区の主立った牧師たち十二名、それぞれもあえて言うなら「聖霊派」（福音派）とか「聖霊派」という分け方は好きではないが、わかり易く実情を説明するために）の牧師の集いがある。三ヶ月に一度ほど集まって、日本のリバイバルのために祈っているのだが、私も最初の集いから参加している。

二年前のある集いで、「二〇〇九年は、日本のプロテスタント宣教百五十周年になりますが、日本の大リバイバルのために、宣教百五十周年の記念大会を開催しては如何でしょうか」と提案した。

周知の如く、日本のプロテスタントは、大きく三つのグループに分かれています。

(1) NCCグループ

(2) 福音派  
(3) 聖霊派

NCCグループとはWCCに参加している伝統的教団のことである。日本の福音派と聖霊派の殆んどすべての教会は、WCCに参加していない。それはWCCの主流派が「社会派」であって、「十字架の福音を語るな」と主張しているからである。それに対してWCC内の「福音派」は、「十字架の福音の宣教こそ、教会のなすべきこと」と主流派に異議申し立てをしているが、主流派の暴言を止めることは出来ない。WCC (world council of churches) とは、「世界教会協議会」のことで、世界宗教者会議などには、このWCCから「キリスト教代表」が派遣される。つまり、世界に対する「キリスト者の顔」となっている。

ところが、このWCCの主流派が、

社会派によって占められてしまったのである。そこで韓国では、このWCCに参加するかどうかで、長老派が分裂して、WCCに参加したのが、「統合派」で、拒否したのが「合同派」である。日本では、「日本キリスト教団」などの古い伝統的教団は参加したが、戦後急速に成長した「福音派」や「聖霊派」は参加しない。

さて、私が「日本プロテスタント宣教百五十周年記念大会」の開催を提案した時、NCCグループ関係には、その「記念聖会」を開こうという何の動きもなかった。「福音派」は、二〇〇九年に北海道で「日本伝道会議」を開催するので、それを「記念聖会」にしようとしていることを知らされていた。そうすればそれは「福音派」だけのことで、日本全体をおおうものではない。また真の意味で、日本プロテスタント宣

教百五十周年記念大聖会とはならない。

そこでまず第一に「聖霊派」だけでも、心から、日本プロテスタント宣教百五十周年を祝って「記念聖会」を開催すべきではないだろうか」と提案した。それからもう一つ、「聖霊派だけでも、この記念大聖会を開催したいが、出来れば、NCCグループも、福音派も、そして我々聖霊派も、教派教団の壁を越えて一緒に「記念大聖会」を持てるようにしては如何でしょうか」と提案した。

この二つの提案は、全会一致で受け入れられ、まず第一に、たとえNCCグループや福音派はやらなくても、我々聖霊派は、心から喜んで「記念聖会」を持つ、そして、大会会長に私を選び、実行委員長としてアツセンブリー教団の船津先生にやっただけのことになった。

さてもう一つの提案、殆んど不可能に思われるが、NCCグループ、福音派、そして聖霊派が、一緒に「記念聖会」を持つというもの。もしこれが成功すれば、戦後初めて、日本の全教会の一致が出現することになる。勿論、どのグループにも属さない単立教会は別として。

何故これが不可能に見えるのかと言えば、福音派の母体とも言うべき「日本福音同盟」は、長い議論の末、

ペンテコステのアツセンブリー・オブ・ゴット教団を加盟させ、カリスマ・ペンテコステを特別視しない決議をした。しかし現実には、福音派の多くの教会はカリスマ・ペンテコステの教会に、明確な一線を引いて、会員が聖霊派の影響を受けないようにしている。勿論その中に、流れに抗して聖霊派に心を開いている牧師たちがいるのだが、素晴らしい牧師たちがいるのだが、素晴らしい牧師伝道によって豊かに実を結んでいるある牧師が「私はペンちゃんと呼ばれています」と、私に語った。ペンちゃんとはペンテコステ教会のこと、それは尊敬の言葉なのか軽蔑の言葉なのかはわからないが、とにかく、少しでもカリスマ・ペンテコステに同調的発言をしたり態度を示すと、特別視されているのである。これが現実で、なかなか壁は崩れない。この「ペンちゃん」が増えると思は崩れる。そしてその日は遠くないと思う。

何故遠くないのか、それは現在、素晴らしいことが起きているからである。

前述の「関東宣教協力会」の集いに於ける私の第二の提案「出来れば「NCCグループ」、「福音派」、「聖霊派」が、その壁を越えて、「一緒に」日本プロテスタント宣教百五十周年記念聖会を一つの会場で共に祝い、

主に感謝をささげることは、主の喜ばれることであり、何と素晴らしいことではないだろうか」をお話しした時、一同は喜びに満たされ、不可能を可能として下さる主の御介入を信じて、立ち上がった。

しかし我々十二名は何者であろうか。イエス様の弟子たちのように「無力で無学なもの」の集いである。ペンちゃんの集いである。一方NCCグループの中には、その教会の歴史が百年以上というのがゴロゴロしている。福音同盟も大きなグループである。我々がアプローチしようとしている相手はゴリアテのように大きい。それに対して、今までやったことのない提案をしようというのである。NCCグループと福音派の間には誰も破ることが出来ないような大きな壁がある。福音派と聖霊派の間も同じようなものである。その大きな壁を越えて、「一緒に」記念聖会を持つというのである。

しかし我々十二名には「信仰」(Iコリント十二・九)があった。その時誰が言ったのかは不明だが、

「皆さん、こういうアプローチには如何でしょうか、「私どもは水くむ僕」として奉仕いたしますから、先生方が先に立って、我々を導いて下さい」。

このアターランス(ことば)は、

よく加藤先生が我々の集いで語っておられたので、たぶん加藤先生が言われたと思われる。加藤先生は、福音派が大きな会場を用いて大集会を開く時には、喜んでお手伝いしたい。そして集会を盛り上げたい。多くの人々の救いのためにお手伝いしたい、と言っておられる方で、「聖霊派の集いには行くな」と信徒をしばる非協力的な福音派の牧師とは大違いである。

この水くむ僕として、裏の奉仕は我々がいたしますから、先生方はどうぞ、表舞台で我々を導いて下さい、というアプローチに、その謙遜さに、私はいたく感動した。そして皆賛成した。

その後、直ちに代表団が、まず福音同盟理事長の峯野先生を訪問し、決定通りのアプローチをした。その時、峯野先生は、私同様いたく感動され、後になって言われたことであるが、聖霊派の先生方の、あの謙遜な態度でのアプローチで、私は福音派の先生方への説得が、大変やり易くなりましたと。

こうして福音同盟理事長の峯野先生は、「私としては、個人的に大賛成です。しかし他の先生方を説得しなければなりませんので、お祈り下さい。ところで、私に一つの提案があります。聖霊派、福音派、NCC

グループそれぞれ、自分たちのスタイルで記念聖会を開催する、但し同じロゴマークでそれをする。そうすれば、どのグループが記念聖会をしたとしても、同じ目的であることが明らかになる。そして最初にプロテスタント教会が誕生した横浜で、三者の合同礼拝をする、というのは如何でしょうか」と提案された。

この素晴らしい提案を受け入れ、次にNCCグループの最高峰である日本キリスト教団議長の山北先生を訪問した。

山北先生はホーリネス教会の牧師の子であり、極めて伝道的な方で、名説教家である。そして社会派の多い日本キリスト教団を「伝道する教団」に変えるために社会派と鮮烈な闘いを行っている素晴らしい牧師である。

山北先生によると、日本キリスト教団は、現在教団を二分するような大きな問題を抱えており、宣教百五十年記念の集いをもつことは全く考えていないとのこと。しかし個人的には「一緒に」記念聖会をもちたい。だから教団を説得する、と確約された。そして遂に日本キリスト教団は、記念聖会を開催することに賛成したのである。

こうして聖霊派の謙遜が実を結び、戦後初めて、NCCグループ、

福音派、聖霊派の代表が一つの場所に集まって第一回の準備会議をもつた。

その時、そこに出席したある福音派の牧師が感動して言った。「これは奇跡です。こうして三者の代表が、共に集まって会議を持つている。これだけでも大成功です」と。

こうして今や、三者三様の記念聖会ももたれるが、同時に戦後初めて三者一致して一つの会場で、日本プロテスタント宣教百五十年記念大聖会が開催されようとしている。

フィジーのトランスフォーメーションも同じであるが、大リバイバルの条件は、「教会の一致」である。

今回の教会の一致のために大きな貢献をしたのは、聖霊派の牧師たちの、「謙遜」である。教会の一致のために先頭にたつて導く、ではなく、「水くむ僕」として仕えます、という信仰と謙遜の勝利である。

この関東地区での教会一致のグッド・ニュースが関西に届き、現在、関西にもその動きが始まっているとのことである。これが全日本に拡大することこそ、リバイバルの備えではないだろうか。

我々日本民族総福音化運動も「水くむ僕」となって日本の教会の一致のために励むことである。

(マタイ二〇・二七)

## 日本民族総福音化運動協議会第2期役員紹介

2月～4月の3ヶ月にかけて評議委員選出選挙が実施され、下記の方々が選出されました。そして6月2日(月)に評議委員会が開かれ、総裁、理事に次の方々が選出されました。この体制で第2期の活動を進めて参ります。どうぞ執り成しお祈り下さい。

総裁	奥山 実 (宣教師訓練センター)		
副総裁	手束 正昭 (高砂教会)		
事務局長	手束 正昭 (高砂教会)		
書記	行澤 一人 (日之出キリスト教会)		
会計監査	小島 武 (ジョイフルグレースチャーチ)		
理事	菅野 直基 (新宿福興教会)	新谷 和茂 (高砂教会)	
	當銘 由正 (聖書福音聖川教会)	橋本 守 (大分カルバリチャーチ)	
	松山 裕 (土崎グローリアチャペル)	三谷 康人 (イエス・キリスト教会・家の教会)	
	森 敬子 (富士見町教会)		
評議委員	大森 隆 (新潟魚沼教会)	小澤 利夫 (シロアムキリスト教会)	
	釘宮 義人 (キリストの福音大分教会)	久保 有政 (レムナント出版)	
	小石 豊 (豊橋キリスト教会)	後藤 利昭 (宇治福音教会)	
	小森 由美子 (高砂教会信徒)	新村 眞一 (小山聖泉キリスト教会)	
	額田 浩 (赤磐教会牧師)		
	長谷川 乃武男 (むさしの神の愛教会・鳩山タウンチャペル)		
	福江 義史 (高知クリスチャンセンター)	藤井 克行 (マナチャペル)	
	股村 大 (緑の牧場グレース・クリスチャンフェローシップ)		
	山中 一正 (淀川栄光キリスト教会)		

## ブロック活動レポート

### 東京ブロック

東京ブロック長  
新宿福音教会 牧師

### 菅野直基



#### 絶妙な三位一体

東京ブロックは、私・菅野と副ブロック長の森姉と聖霊さまの三人が三つよりの糸のようにより込まれ、三位一体で活動をしています。私と森姉が、ある意味対照的なキャラクターを持っているので、それが父と母のように、東京ブロックに安定感と安心感を与えています。この関係を大切にしながら、共に力を合わせて行きたいです。

#### 互いに愛し合う東京ブロック

民福協は、壮大な信仰と目標を掲げていますが、形や実績よりも愛が先行しなければならぬと思います。キリストが愛して下さった愛で、互いに認め合い、受け入れ合い、愛し合うことです。一般には、利害関係や仕事の人間関係というものがあっても、その時はいい人間関係が築かれていても、利害や仕事が終わったら関係も終わってしまうものです。東京ブ

ロックは、真の姉妹、親友、家族となつて、一生継続く人間関係を築いて行きたいと思えます。その関係の中で、日本民族総福音化は進んで行くと思えます。

#### 地区・支部組織作り

二〇〇八年一月のブロック長会議では「地区作りを力を入れたい！」と宣言し、毎月二回くらいづつ、レストランや会議室等で集会を行って来ましたが、遅々とした歩みではあります。東京二十三区に地区長や副地区長を立て、市町村に支部長や副支部長を立て、地区活動や支部活動も、実際に動き始めています。

#### 草の根運動はリバイバルの受け皿

民福協の働きの特徴は、草の根運動にあると思います。東京ブロックを中心に、草の根運動が少しづつ広がっています。草は、抜いても踏まれてもまた再び生えながら、大地に

しっかりと根を下ろし、花や実を支えます。花は神さまの御業で、実は救われる魂です。東京ブロックの草の根運動は、大リバイバルを支えるネットワークです。体の各器官がしっかりと繋がっているように、しっかりと草の根のように愛による繋がりを築いています。二〇〇八年六月のジーザス・ジュン・フェスティバルで小澤評議員より、「リバイバルは近い将来来る」という預言的なメッセージもありましたし、多くの教役者が日本のリバイバルを預言しています。今は、草の根運動でリバイバルの受け皿を準備する時だと思えます。

#### 一発大逆転の信仰を持つて

神さまの御業は一発大逆転です。エステル記のストーリー等は爽快です。日本のクリスチャン人口は一%くらいですが、大逆転したら、九十九%がクリスチャンの国になります。十字架の形はブ

ラスです。マイナスが大きければ大きいほど大きなプラスに変わると信じます。神さまは、十字架によって「ピンチをチャンス」、「マイナスをプラス」に変えてくださると信じます。そのために、「からし種一粒」であっても信仰が必要です。神さまは、私たちの人格や能力よりも信仰を見られます。神さまは、信仰を喜び、信仰を通して働いてくださいます。共に、信仰を持ち、祈り、力を合わせて参りましょう。



6月2日の評議委員会に出席された第2期評議委員の方々